大分市歷史資料館 ニュース

OITA CITY HISTORICAL MUSEUM

vol. 71
2005.4.16

狩野内膳作「南蛮屏風」（複製：原本　神戸市立博物館）

大分市歷史資料館　テーマ展示Ⅰ

国際貿易港－府内沖の浜

4月16日（土）～6月26日（日）

トピックス　移動歷史教室

トピックス

移動歷史教室

これまで資料館では、小中学校を中心に火おこしや、勾玉づくり、粘土埴輪づくり、昔の道具体験、明るさ体験、しごと体験など様々な体験学習の受け入れを行ってきました。おかげさまで、平成16年度は大分市内外の小学校97校、中学校14校の利用がありました。

このように定着した小中学校の体験活動での利用をさらに広げるために、今年度から「移動歷史教室」と名づけ、資料館職員が出向き、学校で体験活動ができるようにします。体験内容は限られますが、資料館に来て体験学習ができない場合はもちろん、学校行事・PTA行事などにも対応します。詳細についてはお問い合わせください。

人気の勾玉も学校で作れますよ！

利用案内

■開館時間　9時から17時（入館は16時30分まで）
■休 館 日　当面の間、毎月第1月曜日の翌火曜日と毎月第2～5月曜日（祝日の場合は開館）
祝日の翌日（土・日曜の場合は開館）
年末年始（12月28日～1月4日）
■観 覧 料　大人200円（団体150円）　高校生100円（団体50円）
※団体は20名以上、小中学生は無料
※特別展開催中は別料金となる場合があります。
■住　　所　〒870-0864　大分市大字国分960-1　TEL097-549-0880

■交通機関
JR久大本線
※豊後国分駅下車
大分バス
○国分新町、向原、今畑、中村、竜原ゆき（全て賀来経由）
※歴史資料館前下車

インフォメーション　Information

ふれあい歷史体験講座

今年度から一般の方のみでも参加できます。ぜひ、ご参加ください。

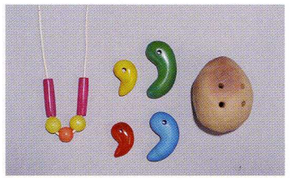
実施日と内容
4月29日（祝）　管玉・丸玉作り
5月28日（土）　勾玉作り
6月25日（土）　粘土はにわ作り

時　間　10時～／14時～（各回約2時間）

参加費
管玉・丸玉作り　1式250円
勾玉作り　1個200円
粘土はにわ作り　1個210円

定　員　各回70名

申し込み　毎月3日より電話でお申し込みください。先着順となります。



今年度から体験のメニューに「管玉・丸玉作り」（写真左）と「土笛作り」（写真右）が新しく加わりました。ぜひご参加ください。

子ども歷史教室

実施日と内容
第1回　4月23日（土）　縄文土偶作りと土器の拓本体験
第2回　5月21日（土）　遺跡発掘体験
第3回　6月18日（土）　土器の接合体験

時　間　各回9時30分～12時

参加費　第1回　240円／第2回　無料／第3回　無料

対　象　小・中学生

定　員　各回50名

申し込み　第1・2回は毎月3日、第3回は5月17日より電話でお申し込みください。先着順となります。

テーマ展解説講座

内　容　テーマ展「国際貿易港―府内沖の浜」について、講座室でスライド使って展示品の解説をした後、展示室をご案内します。

日　時　4月24日（日）　14時～15時30分

講　師　歷史資料館職員　　**申し込み**　不要

参加費　解説講座のみの参加は無料。テーマ展を観覧される場合は観覧料が必要。

ミュージアム・シアター

実施日
4月24日（日）　国際貿易港、海底に没すお茶と十字架1・2
5月22日（日）　国宝「源氏物語絵巻」
6月26日（日）　大宰府発掘／水城と大野城

時　間　13時～

料　金　無料　　**申し込み**　不要

発行日：平成17年4月16日
発　行：大分市歷史資料館　〒870-0864　大分市大字国分960-1　☎097-549-0880
※ホームページ　http://www.city.oita.oita.jp/（大分市ホームページ）の「施設ガイド」も併せてご覧ください。

大分市歴史資料館　テーマ展示Ⅰ

国際貿易港－府内沖の浜

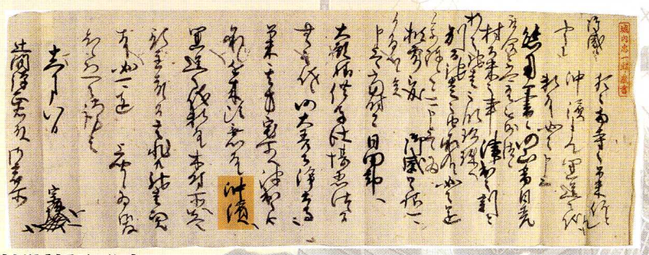
会期:平成17年4月16日(金)～6月26日(日)

今から約400年前の文禄５年（1596）閏７月、大分を大地震と津波が襲い、大きな港町が海底に沈んでしまいました。その港町こそ遠くヨーロッパまでその名が知られ、のちに「瓜生島伝説」を生み出した「沖の浜」です。

近年の大友館跡や中世府内町跡の発掘調査で、陶磁器に代表される海外の品々が大分の町に満ちあふれていた様子がわかってきています。外国貿易船が入港し、それら貿易品がまず陸揚げされたのが府内に隣接する沖の浜でした。

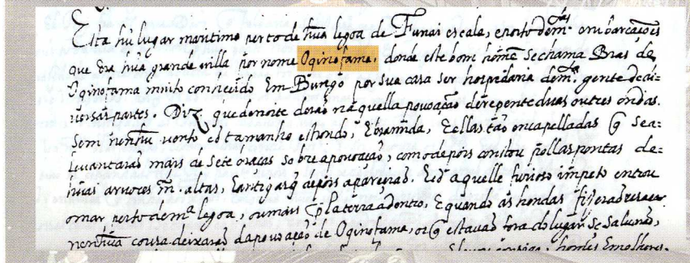
今回は、絵図や文献、考古資料などから国際貿易港として賑わいをみせていた沖の浜の実態にせまります。

「沖の浜」が登場する史料



浦上宗鉄書状（うらがみそうてつしょじょう）　天正13年(1585)ころ　城内信衛氏蔵
大分県立先哲史料館寄託

大友氏の家臣浦上宗鉄が辻間（日出町）の水軍辻間弾正忠に年貢米を「沖の浜」まで運送するよう依頼しています。「沖の浜」が大友氏にとって重要な物資の集積港であったことがわかります。



ルイス・フロイス「1596年日本年報補遺」（部分）
原本：イエズス会図書館

宣教師ルイス・フロイスがローマのイエズス会本部へ送った1596年の活動報告書の一部分。２行目に「oqinofama」＝沖の浜とあり、「府内から約１グレアほど離れた海岸にあり、多くの船の寄港する大きな港町」と説明されています。

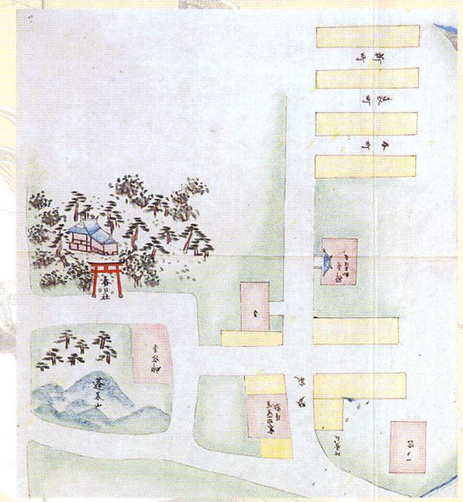
海を越えた陶磁器

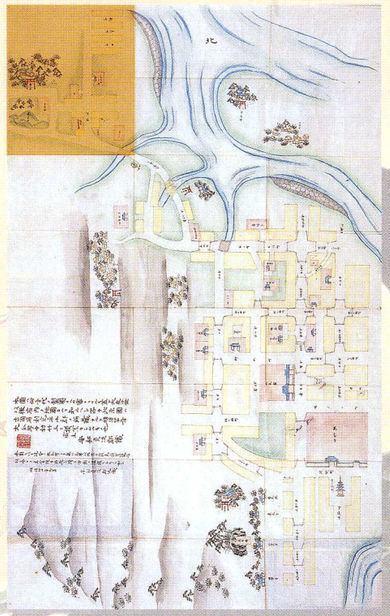
華南三彩貼花文五耳壺（かなんさんさいちょうかもんごじこ）　明時代　勝光寺蔵
当館寄託

沖の浜に入港したポルトガル船や中国船はさまざまな品物をもたらしました。交易品の代表が中国南部や東南アジア製の陶磁器で、中世府内町跡の発掘調査では大量の陶磁器片が出土しています。

写真の壺は中国南部の華南地方で焼かれたもので、大分市内の大友氏初代能直ゆかりの寺に伝わっています。もしかすると、ポルトガル船により運ばれ、沖の浜で荷揚げされたのかもしれません。

沖の浜はどこ

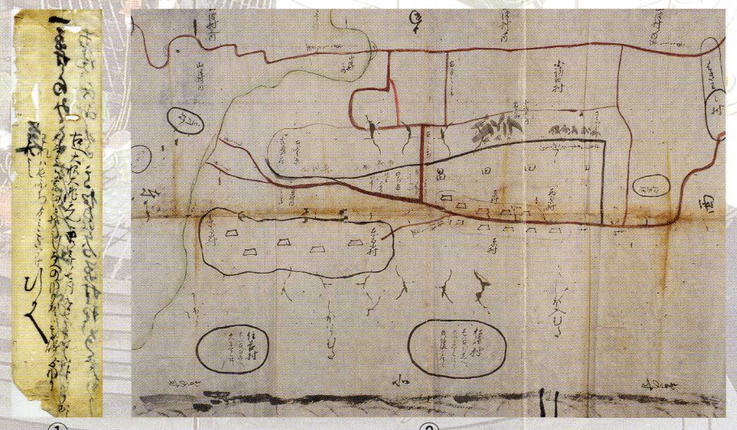




府内古図　明治40年模写　安部征二氏蔵

江戸時代に成立した戦国時代の府内を描いた絵図には、町の北西、大分川の河口西側（全図写真の左上：薄赤部分。右の写真はその拡大）、勢家の北側に本町、裏町、新町の三筋からなる町屋があります。この場所こそ、大友宗麟が「府内に近い港」と呼び、府内や臼杵に約２年間滞在した中国人鄭舜功が著した『日本一鑑』に「沖の浜に入港後、馬に乗って大友宗麟に会いにいった。陸伝いに府内まで５～６里（約３～3.6km）」と記した沖の浜の説明にぴったり一致します。

1596年　閏７月大地震発生、沖の浜海没



①　②

①覚　原村庄屋文書　当館蔵
寛文７年（1667）
②原村絵図　当館蔵
寛文７年（1667）

いずれも江戸時代、別府湾岸に位置する原村（大分市）庄屋家に残った史料です。「覚」の裏に申の年（1596年）の大地震は午後５時頃発生し、大波が村を襲い、地割れが起きたとあります。さらに、絵図では原村よりも海岸に近かった松崎・住吉両村がこの地震で消滅しています。別府湾岸に大きな被害をもたらしたこの地震と津波により、沖の浜も海中に没してしまったのです。

そして「瓜生島伝説」へ

瓜生島絵図　明治21年模写　安部征二氏蔵

別府湾に３つの島があったとする絵図です。一番大きな島が瓜生島で、島内に北陣町、本町、南町からなる町屋があり、町屋の西に威徳寺、東に中津村と西応寺が書き込まれています。

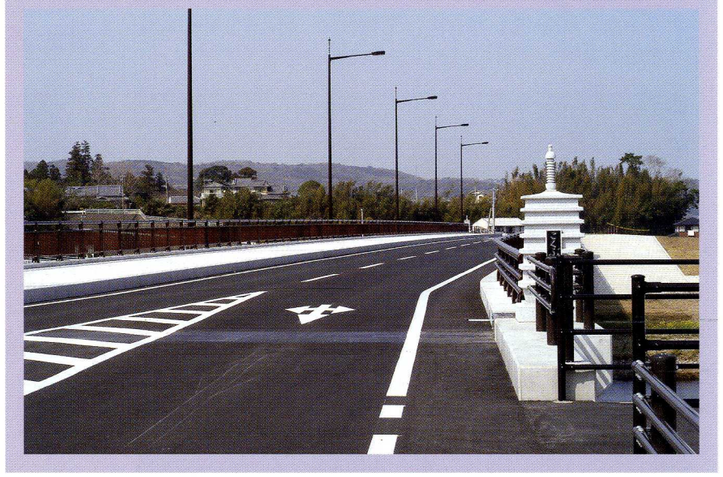
沖の浜が沈んだ地震の約100年後の元禄11年（1698）、府内藩の商人戸倉貞則が著した「豊府聞書」では別府湾岸、勢家村の北にあった沖の浜とも呼ばれた「瓜生島」が大地震で沈んだとされています。「瓜生島」が歴史に登場するのはこの「豊府聞書」が最初で、さらに後の記録ではこの島は東西４km、南北約2.3kmの大きさで、三筋の町屋に約1000軒の家があったといいます。沖の浜や対岸の松崎・住吉村を消滅させた大地震の記憶が時代の経る中誇張され、伝説の島「瓜生島」を生み出したのです。

トピックス　Topics

新国分橋開通

３月26日、賀来地区と横瀬地区をつなぐ新しい国分橋が完成し、開通式が行われました。新国分橋は旧橋の下流側に新設され、全長187m、片側１車線で幅3.5mの自転車兼用歩道を含んだ幅は11mあります。これにより、大型車両の通行が容易となり、国道210号線から資料館へのアクセスがこれまでよりも便利になりました。

国道210号線をご利用の場合、資料館へは「富士見が丘団地入り口」交差点を曲がり、新国分橋を渡って、Ｔ字路を左折してください。春の行楽シーズンには、ぜひ新しい国分橋を使って、資料館へおいでください。



表紙について

手前に金銀モールで装飾された真っ赤な衣装を身にまとったカピタン・モール（総司令官）と呼ばれる南蛮船の船長を先頭に歩く南蛮人一行、奥に荷揚げの風景が描かれている。主にポルトガル人の渡来と貿易の様子を描いた南蛮屏風の一場面である。この左には日本の港に入港した南蛮船、右には外国製品を扱う商店や教会などが描かれる（下図参照）。

さて、よく聞かれるのが、描かれた日本の港がどこかということ。「この港を参考に描きました」という作者側の史料は残っていない。しかし、南蛮屏風が最も多く描かれた桃山時代（16世紀末～17世紀初）に南蛮船が入港するのは長崎に限られていた。また、本屏風の作者狩野内膳の師匠狩野光信は一門の弟子とともに豊臣秀吉の肥前名護屋城滞陣に随伴していた。名護屋と長崎は近く、1593年には長崎に入港したポルトガル船のカピタン一行が正装して名護屋城を訪れ、秀吉と面会している。この時、光信一門が見聞きした南蛮風俗が本屏風に反映されているのは間違いない。とすれば、当時の長崎を念頭に描かれたと考えるのが妥当である。

しかし、長崎の実景をありのままに描いたわけでもない。ポルトガル船が入港する港では普通に目にする光景であった。府内沖の浜でもここに描かれた情景が繰り広げられていたのは間違いない。

南蛮屏風・右隻（複製）